

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2021年12月20日

No.138



約1年かけて復元工事が完了した頃の旧河内家住宅。周囲に植えられている樹木がまだ小さく、屋根のカヤも葺きたての状態。

もくじ

- 1-2 復元建物、郷土の森に建つ
その3…旧河内家住宅
- 3 最近の発掘調査
府中最大級の河原石積み横穴式石室
- 4-5 NOTE
東京オリンピック・レガシーを求めて
- 6 府中の史料に見る江戸時代の流行病
⑦コロリ除けのまじないと祈願
- 7 園内植物探訪
②冬の常緑樹讃歌
- 8 太陽系惑星ツアー
③未来の地球は理想的？

復元建物、郷土の森に建つ

府中市郷土の森博物館には、現在8棟の建物が移築復元されています。小学校や役場・民家・商家等、江戸時代から昭和にかけてにつくられた特徴的なものばかりです。ここでは、各建物について移築復元された頃の写真でふりかえりつつ、それぞれの特色を8回シリーズで紹介します。

その3…旧河内家住宅

郷土の森がオープンする前年の1986年（昭和61）12月、復元工事がほぼ完了した旧河内家住宅です。現在、この建物の左奥にある旧田中家住宅は復元前です。かわりに1982年に復元が完了していた旧府中尋常高等小学校校舎が写りこむ、今では撮影できない風景です。

復元建物、郷土の森に建つ

その3… 旧河内家住宅

市の北部、畑作を中心としていた「ハケ上」と呼ばれる地域の農家を復元したかやぶき民家が、今回紹介する旧河内家住宅です。もともと大沢村（現三鷹市）に建てられていたのを、人見（現若松町）へ移築したものだといわれています。1983年（昭和58）の解体調査によって「天保十五年」（1844）と記された部材が確認されました。これは解体・移築された年で、その建築様式から創建自体は18世紀後半以前ではないかと考えられています。

1968年頃に行われた調査によって、当時府中市内に32棟の民家が、麦わらや、かやなどを材料にした、草葺屋根のまま現存していることが明らかになりました。かつてはほとんどの農家が草葺屋根でした。しかし20年程度で屋根を葺き替えなくてはならず、防火面でも不安があるため、府中市域では大正から昭和にかけてどんどん姿を消していきました。そのため、市内民家の代表的な間取りや使用方法などを公的に保存しようという構想が生まれました。そして、現存していた中から旧河内家住宅が選ばれ、1983年に府中市の重宝（現有形文化財）に指定された後、郷土の森に復元される前提で解体調査が行われました。

調査により、この建物は江戸～昭和にかけて、囲炉裏の移設、屋根にトタン（鉄板）をかぶせるなど、少なくとも4度のリフォームがなされたことが判明しました。文化財というと、創建当初の姿を復元して後世に永く残すもの、と思われるかもしれませんが、しかし、この建物はあえてそうせず、明治末頃に行われた2度目のリフォーム時の様式に復元することにしました。

明治から昭和初期にかけて、現府中市域では養蚕がさかんでした。養蚕自体は江戸以前から行われていましたが、この時期、蚕の育成に最適な温湿度や、消毒・防虫に関する知識が定着しました。それをもとに、居宅を改造して効率よく養

蚕を行う技術が発達していきました。2度目のリフォームはまさにその時期のものでした。

現在、府中市域に養蚕農家はありません。しかし、当時は市全域で行われており、蚕の餌となる桑畑がいたるところに広がっていました。その風景にこの建物は溶け込んでいたはずですが、屋根の上にある煙出し（換気するための窓）や、屋根裏に設置された蚕を育てる空間など、養蚕農家としての工夫が随所にありました。こうした工夫が施されていない建築当初より、養蚕がさかんだった歴史を残すため、この時期の復元としたのです。

今となっては古いかやぶき民家というだけで全国的に希少な存在です。この建物は実際にカマドや囲炉裏で火を焚いたり、夏の蚊帳吊りの会場になったりと、むかしながらのくらしを再現する舞台として活用されています。それだけでも貴重なのですが、失われた府中の養蚕農家の知恵を再現・保存する建物という意味で、もっと注目されてよい存在なのだと思います。（佐藤智敬）



解体・移築前（1983年頃）の旧河内家住宅（上写真）。当時はかやぶき屋根の上にはトタンがかぶせてあったほか、縁側の増設や壁に下見板をつけるなど、リフォームが施されていた。復元にあたってそれらは取り払われ、養蚕がさかんに行われていた頃の姿となった（下写真）。

最近の発掘調査

府中最大級の河原石積み

横穴式石室

西府町一丁目 府中市ふるさと文化財課 西野 善勝



新発見の石室

府中市域の多摩川の沖積地を画す府中崖線沿いの台地上では、古墳時代後期・終末期の約70基の古墳が発見されています。古墳のまとまりを東から白糸台古墳群、高倉古墳群、御嶽塚古墳群と呼んでいます。

今年の夏、御嶽塚古墳群で新たに1基の円墳が発見されました。御嶽塚古墳群では21基目の古墳です。

調査地は、JR南武線西府駅の西方約450mの地点で、比高約10mの府中崖線の北約70mに位置します。墳丘は残っていませんでしたが、埋葬施設の河原石積み横穴式石室とそれを中心に巡る周溝が残存していました。

周溝は、幅2.5m、深さ0.3mで、全周の約3分の1が確認でき、土器片が出土しています。その内径から、墳丘の直径は13～14mと推定されます。

河原石積み石室は遺体を安置した玄室と、玄室へ続く羨道をもつものです。掘り込みの規模は、南北約6m、幅3.5m。積石は、側壁の一部が4段ほど残っていましたが、かなり破壊されていて、細かな形態ははっきりしません。また、副葬品はほとんど残されていませんでした。

このように今回発見された河原石積み石室は、けっして残り具合の良いものではありませんが、その大きさは市内でも最大級です。南方約40mで発見された河原石積み石室の1.5倍ほどあります。築造は7世紀前半と考えられます。北東約450mには、7世紀の中頃に築造されたと推定される上円下方墳・武蔵府中熊野神社古墳がありますが、この古墳が築造される以前の地域の有力者の古墳として注目される発見です。



石室実測図

東京オリンピック・レガシー を求めて



聖火リレー3区で使用されたトーチ（部分）。「TOKYO 1964」というロゴマークが刻印されており、聖火を灯した痕跡のススがついている。

▼ 1964 東京オリンピック展示の計画

今年、夏季としては2回目となる東京オリンピックが開催されました。東京都内は緊急事態宣言下の原則無観客という、通常とはかなり異なる状況ではありましたが、さまざまなドラマが生まれたことは記憶に新しいと思います。

博物館ではオリンピック開催に前後して、1964年（昭和39）に開催された前回の東京オリンピックと府中に関する展示を計画しました。府中市内では当時聖火リレーが行われ、競歩競技の折返し地点となったことが知られていました。しかし館蔵資料を見渡してみても、関連資料はほとんど所蔵していませんでした。そこでまずはどのような資料が残されているのか探ってみることにしました。

▼ 聖火リレーに関する資料探し

聖火リレーについては写真が残る程度でした。当時の『広報ふちゅう』を紐解くと、計3区間に正走者3人、副走者6人、随走者60人の計

69人が選出され、小金井市との境付近から調布市まで駆け抜けたことがわかりました。そこでまずは聖火ランナーの情報から探っていました。

正走者は最終的にトーチをもらったのではないかという情報がありました。1区の正走者だった方は、副走者だったキャスターの小倉智昭さんと、2019年にラジオで55年ぶりに対談していました。その中でトーチを持っていない（手放した）、と話したことを知りました。第2区の正走者は所在不明で、残る第3区の正走者にたどりつき、連絡をとることができました。

現在市外にお住まいのこの方は、トーチとともに、府中市発行の聖火ランナー委嘱状^{いしよくじょう}、自身が走った際の写真を所蔵されていました。しかしトーチは完全な形ではなく、グリップ部分にあたるトーチホルダーが失われていました。走った後、聖火リレーを管轄していた陸上関係者に渡したのではないかとのことでしたが、当時本人は高校生。記憶もあいまいで、探索はしましたが現在も行方不明です。

さらに調査を進めていくなかで、2区の随走者で、着用したユニフォームをお持ちの方が見つかりました。その方は当時中学生で、学校からの推薦で選出されたのだそうです。ユニフォームとともに、ランナー委嘱状や当時の写真などもお持ちでした。

▼ 続々見つかるオリンピック記念資料

並行した調査の過程で見つかったのは聖火リレーにまつわるものだけではありませんでした。

抽選結果（当選）のハガキとともに、観覧した閉会式の半券を保存していた方がいました。そのほか、当時の雑誌や新聞記事をスクラップしている方、発行された記念千円硬貨や記念切手などを保存している方が見つかりました。それぞれの方が、当時の思い出を人生経験も踏まえながら懐かしそうに語られていたのが印象的でした。

前回の東京オリンピックが開催されたのは今から57年前。当時20歳だった人は現在77歳です。そうした世代の人たちにとって、自分自身の経験は「ちょっと昔」の出来事なのでしょう。当時を知らない筆者からすれば、今回の資料調査は貴重なものが市内にまだまだ残されているという発見の連続でした。

こうして、東京オリンピックに関する資料は続々と集結し、ミニ展「1964 東京オリンピックと府中」を2019年10月～翌年9月まで開催することができました。

しかしこの展示会期間中に開催されるはずだった2020年の東京オリンピックは、コロナ禍により1年延期されました。そこで2021年の7月～9月、実際のオリンピック開催にあわせて同名のミニ展を改めて実施し、1964年の東京オリンピックにまつわる資料を2回にわたって展示することになったのです。

▼ オリンピック・レガシーとその保存

オリンピックは各開催地ごとにオリンピック・レガシーが残ります。レガシーとは遺産・遺物といった意味ですが、オリンピック開催を契機として社会に生み出される有形無形の持続的な効果がオリンピック・レガシーと規定されています。東京であれば国立競技場の建設や道路の整備、それに伴うくらしの変化などが該当するでしょう。



1964年に府中市内の聖火リレーで使用されたユニフォーム

1964年の東京オリンピックは、戦後復興をテーマの一つとしていたこともあり、開催自体が当時の人々に強烈な印象を与えました。そのため、選手や聖火ランナー経験者でなくとも、個人が思い出とともに東京オリンピックにまつわる記念碑的なレガシーを持ち伝えていたといえるでしょう。

しかし、そのレガシーも、放っておくといずれ失われてしまいます。府中と関連するものであるならば、個人から博物館へのレガシーの継承が必要になってくると感じています。

このため、2021年の東京オリンピックと府中にまつわる情報や資料についても、早いうちに集めておきたいと考えていました。すると、記念品やボランティアユニフォーム、コロナ禍をうけ公道で実施されなかった聖火リレーのトーチなどの寄贈を受けることになりました。それに加えて、前回のオリンピック資料も改めて集まりつつあります。

展示活動を通して、有形無形にかかわらず様々な府中におけるオリンピック・レガシーが残されていることがわかってきました。こうしたものをいかに博物館として伝えていくことができるかは、今後の大きな課題です。

府中の史料に見る

江戸時代の流行病

流行病は、古くから疫病神がもたらすとされていましたが、コロリ（コレラ）流行の際には、さらに「毒」や「狐」を原因とする俗説が広まりました。開国という大きな時代の転換期だったからか、「近海に繋がれた異国船が海中に毒を流した」「イギリス人が小さな狐を連れてきて、日本に禍をもたらすために置いて帰った」等、外国による陰謀説もありました。多くの人が魚を食べて発症したため、なかには海中に毒が出ている場所があるという話も。魚を避ける人が増え、鮭ネタも椎茸や乾瓢が用いられたため、それらの値段が普段の倍になったと言います。

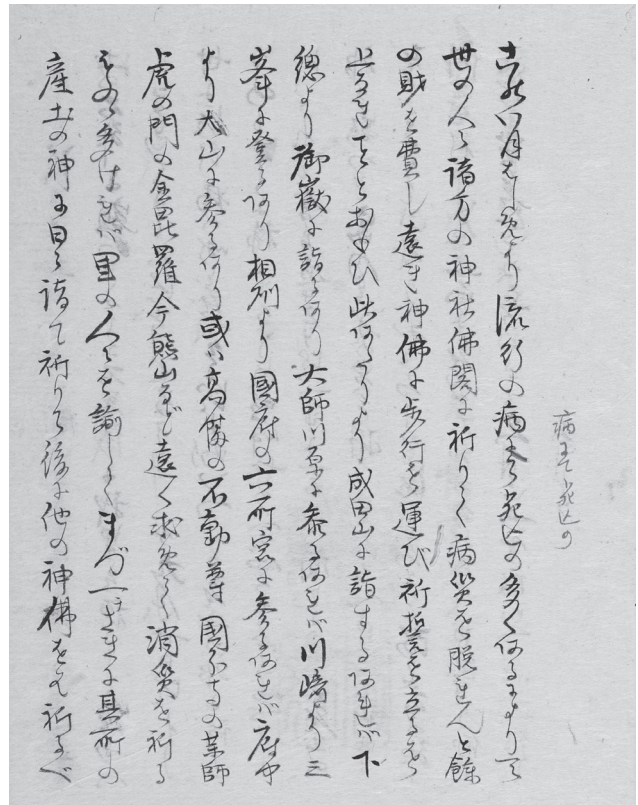
様々な噂が飛び交うなか、この悪病が自分のもとに訪れないように、人々が熱心に行ったことは、まじないと祈願でした。今回も本宿村小野宮（住吉町）の治右衛門が記した安政5年（1858）の記録から、その状況を見てみましょう。

コロリ除けに一番人気の神社は、三峯と御嶽でした。これは、両社が狐を調伏できる狼を眷属とするため、8月25日には小野宮からも青梅の武蔵御嶽神社に参詣しています。この頃、三峯には多い時で1日800人が訪れ、その道筋にある八王子・拝島・青梅・五日市等の旅籠屋は大いに賑わいました。現在であれば、移動を制限して人流を抑制するところですが、コロリ除けの名の下に真逆の事態が出現していたようです。

府中近辺では、七か所の薬師に詣でると感染を免れると言われ、国分寺をはじめ、車返村（白糸台）の本願寺、是政村（是政）の宝性院等に人々が群集。この機会を利用し、国分寺周辺の農家は参詣者に柿や栗等を販売したとありますから、なかなか商魂たくましかったと言えます。

8月下旬には、六所宮（大國魂神社）から獅子頭と神宝の太刀の御蛇丸を借りて府中宿や八幡宿村（八幡町）、屋敷分村（美好町）等を巡行しています。神威によって村をきよめコロリを祓おうとしたのですが、これらの神物が外に出るのはこの時が初めてだったと記されています。

⑦コロリ除けのまじないと祈願



遠方まで祈願に赴く人々への治右衛門からの苦言（？）
「本宿小野宮 内藤治右衛門家文書」

まじないとしては、8月中旬から江戸でヤツデの葉・杉の葉・唐辛子・赤い紙を1つに結んで門口に掛けることが始まりました。しかし、数日後には良くないという話が広まり、みな捨てたとあり、流言に振り回されて右往左往する人々の様子がよくわかります。

このような状況に対して治右衛門は、次のような苦言ともとれる言葉を呈しています。

「人々はこの病災を逃れようと、私財を費やし遠方の神仏に足を運び祈念することが最上だと思っている。この辺りから成田山に参詣する人もいれば、下総（千葉県）から御嶽山に詣でる者もいる。一方、相模（神奈川県）から府中の六所宮に参る人がいれば、府中から大山に詣でる者もある。遠方に行く前に、まず何よりも村の鎮守に日々参詣し、その後にはほかの神仏を祈るべきである」。…ごもつとも。（花木知子）

園内植物探訪

②冬の常緑樹讃歌

季節は、すっかり灰色モードです。ひたすら春が待ち遠しく思えるこの時期、園内の花は乏しいのですが、代わりに「森」を構成する樹木たちが、様々な葉の色模様をアピールします。

園内の樹木はメインストリートのケヤキ並木を筆頭に落葉樹が多く、雑木林のクヌギ・コナラ・イヌシデの他、ハケ下の流れに沿って連なるモミジなどがその中心となっています。これらは冬になると葉を落とし、幹と枝だけの姿で空虚な景観を醸し出します。まさに冬枯れと言う表現がぴったり当てはまる情景です。但し、葉を落とす前には見ごたえのある光景が園内を彩ります。それは紅葉です。

紅葉は、活発に光合成を行った後、もはや活動不能となって散りゆく葉が直前にお色直しをして別れを告げているようにも見えます。切ない反面、秋から冬の淀んだ空気を一掃してくれる有難い現象でもあります。紅葉については、本誌No.122のNOTE「変身！紅葉マジック」で詳しく説明した通り、赤く映える

数種のモミジが代表的ですが、県木園のイチヨウなど鮮やかな黄色も壮観です。モザイク状に園内を埋め、様々な復元建物などを背景に独特の風情を演出します。但し、赤と黄だけの装飾では不完全に思えます。森本来の色彩は、樹木を覆う葉の緑にこそあるのではないのでしょうか。落葉樹に混じり、冬でもしっかりと葉を付けている常緑樹の存在があればこそ、紅葉が終わっても、寒空に緑を残すことができるのです。ましてや紅葉の時期には、赤と黄をほど良く合わせ、3色一体で独特の明るさを提供してくれるのです。まさに常緑が紅葉とコラボして特別な色模様を作っているというわけです。

常緑樹と落葉樹は見た目が全く異なります。それぞれの越冬に関わる進化の違いから来ているものです。日本は北国の落葉樹中心の森と、関西以南の常緑樹中心の森で構成されています。北では冬の寒さが厳しいので葉も凍ってしまうことから、樹々は冬季休業する形に進化しました。ゆえに落葉樹の葉は寒さに耐える必要が無くサラサラした感じに見えます。反対に常緑樹の葉は寒さに挑むため体を鍛える方向に進化しました。そのため、クチクラ層という防御層を厚くして葉が服を着込むスタイルとなり、厚くゴツゴツした感じのです。和風庭園などでは豪華さや威厳を重視し、少し重たい雰囲気を出す常緑樹が中心になっており、モチノキやサザンカなどが良く使われて

いたようです。近年はむしろ軽やかなテイストが人気で、落葉樹の割合が増えてきました。暑い夏には日差しを遮り、寒い冬には葉を落とし光を取り込んでくれるため、用途としても都合が良いからです。逆に常緑樹では冬場の日光がガードされ地上や部屋には届きません。反面、常に葉のあることで垣根などの目隠しには最適です。園内に復元された農家の防風生垣として常緑のシラカシが使われていることから大変有効であることがわかります。日差しの問題も木漏



園内に落葉したモミジ

れ日が通るような剪定を施せば、まんざらでもありません。何よりも落葉樹が散らかす大量の落ち葉が生じないので、掃除に手を患わず心配がないのですから。

当館園内は両者が適所に分散し、「郷土の森」は常緑&落葉のブレンド樹林です。あっという間に紅葉が過ぎ、赤と黄が消滅したとしても、引き続き常緑の葉は冬でも青く繁り、冷たい情景を緩和してくれる役割を果たします。本来の働きは酸素を生成し、森の空気を浄化する常緑樹。暗い冬の景観にとっても清涼剤になっているのです。加えて、自身の緑を交えた3色の妙で紅葉の見え方まで一新する功績を称えれば、常緑樹はまさに「浄力樹」と呼ぶに相応しいでしょう。（中村武史）



太陽系惑星ツアー



③未来の地球は理想的？

1日が24時間よりも、もっと長かったらいいのに…、もっと気軽に海外に行けたらいいのに…なんて夢見たことはありませんか？ その夢、未来の地球が叶えてくれるかもしれません。

実は、地球が約46億年前に誕生してから、これまでずっと1日が24時間（正確には23時間56分4秒）だったわけではありません。地球の1日は、地球自身が一回り（自転）するのにかかる時間です。地球が誕生して間もないころは、1日が4～6時間ほどだったと言われています。これでは、あっという間に日が暮れてしまい、1日の中で仕事や学校に行ったり、睡眠をとったりすることは難しいですね。では、なぜ1日の長さが伸びたのでしょうか？ その理由は、月にあります。

右下の図を見てください。月の引力と地球の遠心力によって、海面の高さに差ができて、海水の部分は楕円のような形になっています。その高いところが月に引っ張られると、地球の自転とは逆方向に力が働くこととなります。その結果、海水と海底の間に摩擦が起き、自転ブレーキがかかって、回転が遅くなっていきます。その量は100年に約0.0024秒なので、1日が約1時間長くなるためには、1億年以上かかる計算になりますが…。

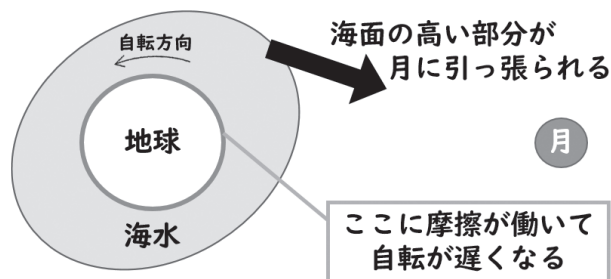
今から1億年ほど先の未来では、地球の陸地の様子も今とは違っています。日本の目の前にハワイがあるかもしれません。

地球は陸地や海を乗せた十数枚のプレートで覆われています。プレートは、厚さ60～100kmほどの巨大な岩板です。その下にはマントルと呼ばれる、岩石なのにゆっくりと対流して動いている層があります。そのためマントルが動くと、プレートやその上の陸地も少しずつ動いていきます。実際に日本とハワイの距

離は、1985年からの観測では年間約6cmずつ、2011年の東日本大震災以降は約12cmずつ近づいていると測定されています。このままいけば、約1億年後には日本とハワイが陸続きになるかもしれません。現在は飛行機に乗っても日本から8時間ほどかかり、日帰りは難しいですが、1億年後には2泊3日でもゆったり観光ができるでしょう。

さらに2億5千万年後には、日本とオーストラリアも陸繋がりになり、北半球に「超大陸アメイジア」が誕生するという説もあります。そうなれば、車や電車で世界一周旅行も夢ではありません。

とはいえ、1日の長さも、大陸の移動のスピードも、最終的には地球まかせ。地球の自転のスピードの変化も一定ではありませんし、ハワイ旅行に行く前に、日本がユーラシア大陸とつながったり、ハワイがプレートの下に沈んでしまったりする可能性もあります。それは地球が活着ているからです。そう考えると、ハワイが目の前に来るかもしれない未来の地球を夢見るよりは、今の地球を満喫する方が良いでしょう。（塚田小扶里）



地球の自転が遅くなるメカニズム